

1904. 5. Petrak, F.: *Gaeumannia* n. gen., eine neue Gattung der Sphaeriales. *Sydownia* 4: 337-340, 1950. 6. Petrak, F.: Über die Gattung *Exomassarinula* Teng. *Sydownia* 13: 23-28, 1959.

* * * *

筆者らがさきに日本産として記録した *Gibbera maeshimana* Hino et Katum. および *G. philippinensis* Rehm はいずれも子囊の性質その他から *Gibbera* 属に属するものではなく、Sphaeriaceae 中の *Melchioria* 属に入るべきものであることが明らかとなつたので、これらを *Melchioria* 属に移して新組合を行なつた。またこの2種の菌に類似する新種菌 *M. pseudosasae* Hino et Katum. を記載した。*Melchioria* 属は日本では初めて記録された属で6種の菌を含むことになるが、その中5種が竹類寄生菌で、東アジアおよび南米に分布する。

○タタラメという植物（前川文夫） Fumio MAEKAWA: “Tatarame” identical with *Asarum caulescens*.

新撰字鏡に莘と書いて太太良女と読ましている。大言海は「爐(タタラ)は火の赤いことによるか」といった関係あるのかないのかわからない言葉を出して、タガラシのことと、これには紅白あるが紅い花の方だという。甚だ要領を得ないのは植物を知らずに語源を扱うからである。源氏物語の末摘花の条に「たたらめの花の如(ごと), 三笠の山の処女(をとめ)をば捨てて……」というのがある。近日、久松潛一、志田延義: 古代詩歌に於ける神の概念(昭和42、再版) p. 69 をみたら莘とは細辛、ウスバサイシンのことであろうとだったので、これはこちらに関係があると眼をこらしたが、さてウスバサイシンの花の如、処女を捨ててとはどういうことかと頭をかかえた。すると最初の「火の赤きによるか」がピンと来た、というのは、これをフタバアオイだとすると実に打つてつけになるのである。それはこの花は蕾の時じつに濃い赤褐色を呈するが、いざ開花すると急速に色あせて白っぽくなってしまう。それでもはじめてみれば実にほのぼのとした桃色だけれども、はじめの濃い赤を知っている者の眼からみれば全く白く色あせている。フタバアオイは賀茂の祭の神事につかう位、平安時代にはよく知られた草であったから、この花色の変化は常識であり、従って多々良女の花の色の如く、搔練好むや云々の風俗歌にも読みこまれ、また紫式部は当然これも知っていて、文章に使ったものであろう。内膳司式に青草を漬ける時に、多々良比売(タタラヒメでこれが訛ってタタラメとなった)の花の乾したのを三斗も加えて、さらに塩を加えたとあるから、当時の花の利用が何等かの意味をもっていたのであろうが、もしも今どこかにこういう習慣が残っていたら、ぜひ知りたいものである。それからこれは余談だが、フタバアオイの花を乾すとすれば、あの長い莖の末端に出てる花を摘んだに相違なく、さればこそ末摘花の条下に使用したのだとは少々うがち過ぎか。

(東大・理・植物学教室)